

ディスコースの中で気づきを促す文法指導

島 田 勝 正

日常のことばのやりとりにおいては、同じ意味を表すために、2つ以上の異なる言語形式が存在する場合がある。その形式を単独で使う場合は、いずれを使っても問題はないが、一連の文と文とのつながり、つまり、ディスコース (discourse) においては、いずれの形式がより適切かということについて、ある一定の規則がある。そこで、本稿では、まず、ディスコースの特徴を明らかにし、異なる言語形式がディスコースの中でどのように使い分けられているかを考察する。そして、能動態と受動態、与格交替 (dative alternation)、複文における従属節の位置を例にとって、それぞれを使い分ける能力を養うための指導オプションを示す。

1. 形式・意味・使用

Larsen-Freeman (2003) は、コミュニケーションの側面として、形式 (form)、意味 (meaning)、使用 (use) の3つを挙げている。形式とは、言語の単位がどのように形成されているかをさし、意味とは、形式が示す内容のことである。そして、使用とは、形式がコミュニケーションの中でどのように使われているかをさす。Larsen-Freeman (2003) によれば、使用は、さらに、ことばの社会的な機能¹⁾とディスコースのパターンに分類できる (pp. 34-35)。

キーワード：文法指導，ディスコース，気づき

形式は文法の重要な側面であるが、1つの側面にすぎず、ある形式がコミュニケーションの中でどのように使われているかということも重要な1つの側面である。本稿では、文法をこの使用の中のディスコースパターンという側面から考察する。文法事象をディスコースの観点からみると、単一の文レベルではわからなかったことがわかるようになる。

2. 結束性と一貫性

文と文がつながって1つのまとまりを構成するときに、このまとまりのことをディスコース（または、談話）という。ディスコース能力（discourse competence）は、文法能力（grammatical competence）、社会言語学的能力（sociolinguistic competence）、方略能力（strategic competence）とともにコミュニケーション能力（communicative competence）を構成している（Canale, 1983）。

あるディスコースがどのように構成されているかについては、文法的な結束性（cohesion）と意味的な一貫性（coherence）に分けることができる。結束性とは、文と文が明示的に互いに結びついてテキストを構成することをさす。これに対して、一貫性とはテキストに明示的に示されていない文と文の結びつきをさす。

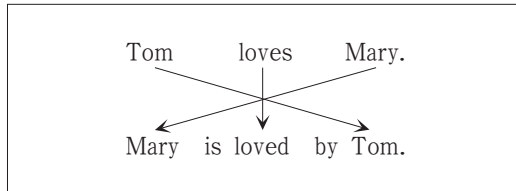
3. 結束性による文法への気づき

前述したように、結束性とは文と文の明示的な結びつきのことである。そして、英語では、結束性のあるディスコースにおいて、情報は既知のものから未知のものへ、つまり、旧情報から新情報へと提示される（Widdowson, 1978）。本節では、能動態と受動態の使い分け、与格交替の使い分け、および、複文における従属節の位置について、結束性の具体的なディスコースを例にとって考察するとともに、それぞれを使い分ける能

力を養うための指導オプションを示す。

3.1 能動態と受動態

受動態の導入は、以下に示すように、能動態から受動態への機械的な書き換えが支配的であり、両者の使い分けについては言及がないことが多い。



そこで、能動態と受動態の使い分けを結束性というディスコースの観点から考察する。

(1)

A: What did the rain do?

B: The crops were destroyed by the rain.

(2)

A: What did the rain do?

B: It destroyed the crops.

(3)

A: What happened to the crops?

B: They were destroyed by the rain. (Widdowson, 1978, pp. 25-26)

(1)のディスコースにおいて、Aの問いかけに対するBの受け答えはど

こか不自然である。A の発話の主題（旧情報）は the rain であるから、(2) に示すように、B は the rain を It で受け、これに続けて destroyed the crops と能動態を使って新情報を示さなくてはならない。

(1) のディスコースにおいて、B の発話は単文レベルでは文法的に間違っていないが、A の問いかけには適切に対応していない。したがって、B には文法能力はあっても、ディスコース能力は不十分である。一方、(2) のディスコースにおいては、B の発話は文法的にも正確で、A の問いかけに適切に対応しているので、B には文法能力もディスコース能力もあると言える。

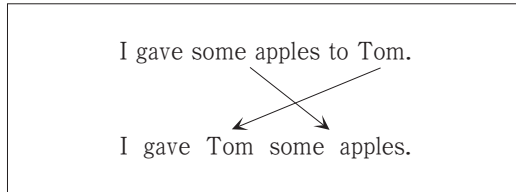
(3) のディスコースにおいては、A の問いかけの主題（旧情報）は the crops であるから、B はそれを They で受け、これに続けて、were destroyed by the rain. と受動態を使って新しい情報を示している。これは受動態が必然的に使われるディスコースなので、B は文法能力もディスコース能力もあると言える（表1）。

表1：文法能力とディスコース能力

	文法能力	ディスコース能力
(1)	○	×
(2)	○	○
(3)	○	○

(1) のディスコースにおける B の発話の問題点は、新情報を能動態で示すべきところ、受動態を使ったことにある。つまり、ディスコースの流れにしたがって、旧情報→新情報と示すためには、言語形式の能動態・受動態を使い分けなければならない。このように、能動態と受動態の2つの形式の使い分けは、文の情報構造、つまり、旧情報は文の前方に、新情報は文の後方に配置するという「文末焦点の原則（End-focus Principle）」を使っ

いずれも正しいので、どちらでもよいという誤解をまねく。そして、従来の文法指導では、以下に示すように、(4)aの第3文型(SVO)から(4)bの第4文型(SVOO)への機械的な書き換えがよく行われてきた。



ある検定教科書においては、2重目的語構文の説明は、

動詞+A+Bを使った文は to や for を用いて以下のように書くこともできます

My father gave me a watch. → My father gave a watch to me.

(*New Crown* 2, 2014, p. 74)

となっている。ここでは、形式操作上の説明にとどまり、両者の使い分けについては言及がない。したがって、機械的な書き換え規則を学習して、その練習を重ねても実際のコミュニケーションにおいて両者の適切な使い分けができるようになるという保証はない。

この与格交替について、単文レベルでは、萩野(2008)は、「前者は2つの目的語の間に「所有関係(have関係)」が成り立っており、一方、後者は必ずしも「所有関係(have関係)」は意味しない」と説明している(p. 15)。また、児玉・野澤(2009)も、同様に、「二重目的語構文では、移動の結果として生じる所有状態がプロファイルされる」と所有関係で説明している(p. 44)。さらに、長(2016)では、「二重目的語構文では動詞の行為による「モノ」の到達点、つまり受け手が有生物でなければなら

ないという制約がある」とし、これは、「二重目的語構文では、間接目的語と直接目的語では2つのモノの間に所有関係が存在することまで意味として含んでいるためであり、直接目的語を所有できないからである」と説明している（pp. 63-64）。いずれも単文レベルでの説明に終始し、ディスコースの観点に立って両者を適切に使い分ける規則に関しての説明は見当たらない。

そこで、2重目的語構文の使い分け、および、次の節で述べる複文における従属節の位置の使い分けについて、現職教員²⁾ および大学生³⁾ がどの程度知っているかを調べるために、簡単なアンケートを実施した（附録）。ただし、「知っている」と回答しても、その説明がディスコースに基づかない場合や、間違っている場合は「知らない」に算入した。表2の結果から分かるように、大学生から現職教員に至るまで「知らない」という回答が圧倒的に多かった。

表2：アンケート結果

	現職教員 (N=19)		大学生 (N=58)	
	知っている	知らない	知っている	知らない
2重目的語構文	1	18	3	55
従属節の位置	0	19	0	58

形式の違いは意味の違いを導く。したがって、第3文型（SVO）と第4文型（SVOO）という2つの文型には何らかの意味の違いがあるはずである。ディスコースの観点からみると、場面に応じて両者のいずれかがより適切であるかがわかる。

次に、この2つの文型の使い分けについて、両者の違いに気づかせる指導オプションの具体例を示す。この活動も旧情報と新情報の位置関係を、ディスコースの中で気づかせようとしている。

Christmas presents for five children

Husband: I'm home. I bought a lot of Christmas presents for children. Look. Here're a toy train, a pretty dress, a Gucci purse, and a necklace.

Wife: We have five children. You have to buy one for Taro. He's still studying in England. What will you give him?

H: (1)I'm going to send him a warm coat. But it is very expensive!

W: I see. Who are you going to give this toy to?

H: (2)I'm going to give it to Jiro. He wants to be a train driver.

W: Oh, yes! Rumi wanted some jewellery. What did you buy her?

H: (3)I bought her a gold necklace. (4)She'll surely show it to her boyfriend.

W: Oh, who did you buy this dress for?

H: Well, well, (5)I bought it for Emi. She wanted a party dress.

W: She is still only five. OK. Who are you going to give this purse to?

H: (6)I'm going to give it to Mami. I hope she'll love it.

W: They'll all be happy. By the way, what will you give me?

H: Sorry, (7)I didn't buy you anything. Instead, (8)I'll give you a tender kiss!

< 表 1 >

	whom	what
The husband is going to send		

< 表 2 >

	Sentence number	Rule
Group A		
Group B		

(1) スキットの概要をつかむ。

指示① これはクリスマスプレゼントを買ってきた夫と、彼を出迎えた妻の会話です。上記の<表1>の空欄を埋めなさい。

夫が5人の子どもたちに贈ろうと考えているクリスマスプレゼントについて、「誰に」、「何を」あげるかという情報を上記の表1の空欄を埋めることで整理する。

(2) 重要な部分が文末に来ることをつかむ。

指示② 破線を引いた(1)～(8)の文の中で、どの単語が強く発音されていたでしょうか。ダイアログをよく聞いて強く発音された部分を□で囲みなさい。

生徒の理解度に応じて、相手に伝えたい重要な情報は、相手によく聞こえるように大きな声で発音されるというヒントを与える。そして、強く発音される部分というのは、それが新情報だからであるということを押さえる。まずは生徒一人ひとりに考えさせて、その後、ペアワークまたはグループワークで意見交換させる。

(3) 問題文进行分类する。

指示③ 破線を引いた文を2群(グループA:グループB)に分けなさい(<表2>)。解答は文番号だけで構いません。

適宜、次のヒントを与える。

ヒント1:該当する文の数はグループA=4, グループB=4です。

ヒント2:(1)文の終わりに注目する,(2)文の終わりの単語の特性に注目する。

ヒント3:(1)前の文との関係に注目する,(2)前の文の疑問詞に注目する。

ヒントは、順次、別々に出した方が効果的である。正解は、グループAに(2),(4),(5),(6),グループBに(1),(3),(7),(8)が入る。問題文进行分类するときには、必ず分類の根拠(判断基準)について説明させる。

文の最後の名詞の特性に注目した場合、その名詞が人（グループA）、または、物（グループB）に分類できる。

（板書またはPC画面例）

<グループA>

- (2) I'm going to give it to Jiro.
- (4) She'll surely show it to her boyfriend.
- (5) I bought it for Emi.
- (6) I'm going to give it to Mami.

<グループB>

- (1) I'm going to send him a warm coat.
- (3) I bought her a pearl necklace.
- (7) I didn't buy you anything.
- (8) I'll give you a tender kiss!

さらに、問題文とその前の文との関係に注目した場合、前の文が Who で始まる文（グループA）と What で始まる文（グループB）に分類できる。

（板書またはPC画面例）

<グループA>

- Who will you give this toy to? → I'm going to give it to Jiro.
- Who did you buy this dress for? → I bought it for Emi.
- Who will you give this purse to? → I'm going to give it to Mami.
- She'll surely show it to her boyfriend.

<グループB>

What did you buy her? → I bought her a gold necklace.

What will you give him? → I'm going to send him a warm coat.

What will you give me? → I didn't buy you anything.

I'll give you a tender kiss!

(4) 使い分けの規則を考える

指示④ これらのデータから分かったことに基づいて、使い分けの「規則」を作りなさい。

次に正解例を示す。

- (1) 相手に伝えたいことが「人」である場合は、文の終わりに「人」が来る。

(例) I'm going to give it to Mami.

SVO (第3文型) = S + V + NP + PP (人の前に前置詞が来る)

- (2) 相手に伝えたいことが「物」である場合は、文の終わりに「物」が来る。

(例) I bought her a pearl necklace.

SVOO (第4文型) = S + V + NP + NP (物の前に前置詞は来ない)

したがって、＜表2＞は以下のように完成することができる。

	Sentence number	Rule
Group A	2, 4, 5, 6	相手に伝えたいことが「人」である場合は、文の終わりに「人」が来る。
Group B	1, 3, 7, 8	相手に伝えたいことが「物」である場合は、文の終わりに「物」が来る。

(5) 規則を使い分ける

この活動は学習が進んだ段階で、次のように発展させることができる。
まずは、「誰に」「何を」の順序を文脈から判断する問題から始める。

指示⑤ ダイアローグの(1)(2)(3)(5)(6)(7)の空所に適切な文を入れなさい。ただし、答えは2つの選択肢(a, b)の中から選びなさい。

Husband: I'm home. I bought a lot of Christmas presents for children. Look. Here're a toy train, a pretty dress, a Gucci purse, and a necklace.

Wife: We have five children. You have to buy one for Taro. He's still studying in England. What will you give him?

H: (1)(). But it is very expensive!

W: I see. Who will you give this toy to?

H: (2)() He wants to be a train driver.

W: Rumi wanted some jewellery. What did you buy her?

H: (3)() (4) She'll surely show it to her boyfriend.

W: Oh, who did you buy this dress for?

H: Well, well, (5)() She wanted a party dress.

W: She is only five. OK. Who will you give this purse to?

H: (6)() I hope she'll love it.

W: They'll all be happy. By the way, what will you give me?

H: Sorry, (7)(). Instead, (8) I'll give you a tender kiss!

- | | |
|---|--|
| (1) a. I'm going to send him a warm coat. | b. I'm going to send a warm coat to him. |
| (2) a. I'm going to give it to Jiro. | b. I'm going to give Jiro it. |
| (3) a. I bought her a gold necklace. | b. I bought a gold necklace for her. |
| (5) a. I bought it for Emi. | b. I bought Emi it. |
| (6) a. I'm going to give it to Mami | b. I'm going to give Mami it. |
| (7) a. I didn't buy you anything | b. I didn't buy anything for you. |

この指導オプションは、さらに発展したバリエーションとして、「誰に」「何を」の順序について、文脈から判断して発話するタスクが考えられる。

3.3 複文

(5)

- a. When I came home, my father was reading a newspaper.
- b. My father was reading a newspaper when I came home.

従属節を含む複文では、従属節を(5)aのように文の前半に置くのか、それとも(5)bのように後半に置くのかという選択に迷うときがある。

ある検定教科書では、

タケシが家に電話をしたときの家族の様子を表す下の1~4の絵について、タケシになったつもりで、例のどちらかの表現を使って説明しましょう。(下線：筆者)

例) When I called my father, he was reading a book.

My father was reading a book when I called him.

(*Total English 2*, 2014, p. 21)

となっている。この教科書では従属節を文の前半に置く場合と後半に置く場合の2つの例が示されている。単一文ではいずれを使っても文法的に正しいので、特に問題はない。しかし、これらの文をディスコースの中で用いる場合には両者を使い分ける必要があるのに、その使い分けについては言及がない。そこで、ここでは、従属節を文の前半に置くのか、それとも、後半に置くのかという使い分け規則の指導オプションについて考察する。指導手順を以下に示す。

指示① Text A と Text B の2つのテキストを比べなさい。

指示② それぞれのテキストの最後の文に注目しなさい。

指示③ 最後から2番目の文に注目しなさい。

指示④ 最後から2番目の文と、最後の文との関係について考えなさい。

指示⑤ 従属節の位置についての使い分けの規則を考えなさい。

<Text A>

A: I came home from work very late at night.

I was so tired and sleepy.

B: So you took a bath immediately?

A: Yes, I took a bath at 11:30.

B: What did you do then?

A: After I took a bath, I went to bed.

<Text B>

A: I came home from work very late at night.

I was so tired and sleepy.

B: So you went to bed immediately?

A: No. I didn't.

B: When did you go to bed then?

A: I went to bed after I took a bath.

Text A では、最後から2番目の文は What did you do then? と What で始めて、入浴後にしたことを尋ねている。そして、その問いを受けて最後の文は、After I took a bath, I went to bed. と、入浴後にしたこと、つまり、「就寝した」ことを新情報として後半に置いている。これに対して、Text B では、最後から2番目の文は When did you go to bed then? と就寝時間を聞いている。この問いを受けて I went to bed after I took a bath. と、「お風呂に入った後」を新情報として後半に置いている。このように、従属節を含む複文では、新しい情報を含む節を後半に置くが、何が新しい情

報であるかは、その前の文によって変わる。ディスコースを用いた指導オプションでは、文と文のつながりという観点から、従属節を文の前半に置くのか、それとも、後半に置くのかという、従属節の位置についての使い分け規則を導いている。産出タスクとしては、Text A および Text B の最後を空欄にして、(a) After I took a bath, I went to bed. (b) I went to bed after I took a bath. のいずれかを発話させるタスクが考えられる。

4. まとめ

本稿では、ディスコースにおける文と文との明示的なつながりという結束性の観点から、文法に気づかせようとする指導オプションについてみてきた。

ディスコースに結束性がある場合は、文の後半に伝えたい新情報が来る(文末焦点の原則)。そして、能動態と受動態、与格交替、および、複文における従属節の位置は、情報構造における文末焦点の原則で説明できる。そして、この原則にもとづいて、ディスコースの中で適切な文を「使い分ける」能力を養う指導オプションを示した。

注

- 1) 「機能」は学習指導要領では「言語の働き」として表現されている。
- 2) 2016年度桃山学院大学「英語教員夏季ワークショップ」(免許更新講習) 参加者19名
- 3) 2016年度桃山学院大学「英語 IVA」, および, 「英語科教育法Ⅰ・Ⅱ」受講生58名

参考文献

Canale, M. (1983). From communicative competence to communicative language pedagogy. In J. Richards & J. Schmidt (Eds.), *Language and communication*. (pp. 2-27). New York: Longman.

Larsen-Freeman, D. (2003). *Teaching language: From grammar to grammaring*.
Boston: Thomson Heinle.

Widdowson, H. (1978). *Teaching language as communication*. Oxford: Oxford
University Press.

児玉一宏・野澤 元 (2009). 『言語習得と用法基盤モデル』 研究社

長 加奈子 (2016). 「学習者コーパスから見える母語の事態把握の影響—二重
目的語構文と to 与格構文から—」 石川由香他 (編) 『言語研究と量的アプロ
ーチ』 金星堂

萩野俊哉 (2008). 『英文法指導 Q & A こんなふうに教えてみよう』 大修館書
店

附録

文法の使い分け規則に関するアンケート

■ 1. 第3文型と第4文型

① I gave some chocolates to Tom. (第3文型)

② I gave Tom some chocolates. (第4文型)

上記①②の2つの文の意味は同じです。では、①②はどのように使い分けたら
いいのでしょうか。その規則について知っていることを書いて下さい。

☐ 知っている

☐ 知らない

「知っている」と答えた場合、

[規則]

どのようにして上記の規則を知りましたか。

A. () 学校で先生に習った

- B. 塾で先生に習った
C. 友達に教えてもらった
D. 自分で（ ）を調べた
E. 自分で考えた
F. その他（ ）

■ 2. 従属節の位置

- ① When I was young, I often listened to the radio. (従属節が文の前半に来る)
② I often listened to the radio when I was young. (従属節が文の後半に来る)

上記①②の2つの文の意味は同じです。では、①②はどのように使い分けたらいいのでしょうか。その規則について知っていることを書いて下さい。

- ☐ 知っている
- ☐ 知らない

「知っている」と答えた場合、

[規則]

どのようにして上記の規則を知りましたか。

- A. () 学校で先生に習った
- B. 塾で先生に習った
- C. 友達に教えてもらった
- D. 自分で () を調べた
- E. 自分で考えた
- F. その他 ()

Grammar Instruction: Noticing through Discourse

SHIMADA Katsumasa

The purpose of this article is to introduce practicing teachers to a new way of teaching grammar, with special reference to the three grammatical categories: active and passive voice, dative alternation and complex sentence construction, all of which can involve some difficulties in choosing a more appropriate form to better fit a particular context.

The three dimensions applied to language in communication are *form*, *meaning* and *use*. Use can be divided into *social functions* and *discourse pattern*. Discourse pattern can be further divided into the two categories of *cohesion* and *coherence*. Cohesion refers to the logical relationships in propositional development between different sentences in a text, while coherence is concerned with the relationships which link the meanings of utterances in a discourse.

There are some cases in which a sentence constructed with the grammatical forms mentioned above may be grammatically correct at a sentence level, while being inappropriate at a discourse level. Therefore, from the communicative point of view, it is important to develop not only grammatical competence but also discourse competence, the ability to select and employ a more appropriate sentence or grammatical form in a particular context.

It is generally stated that in English, propositions are organized in such a way that what is known or old information, comes first in a sentence and what is unknown, or new information in the sentence is placed at the end. This is called the End-focus Principle.

In this article, focusing on the information structure, I will introduce a teaching technique to assist learners in noticing the distinction between usage

ディスコースの中で気づきを促す文法指導

of passive and active voice, dative alternation (SVO and SVOO) and the placement of subordinate clauses in complex sentences.